

日本計量生物学会への期待
土居主尚 (放射線医学総合研究所)

大学院を修了し、全く何も知らない放射線の分野の分野に飛び込んで気が付いたら5年以上が経っておりまして。就職してしばらくの間は新しいことを覚えるのに必死であり、計量生物の研究からはやや遠ざかっていたように思います。その間に日本の状況は大きく変わり、特に2011年3月11日の東日本大震災の後は放射線に関わる研究者の生活は急激に変化しました。特に震災の数日後から開始した一般市民の方々を対象とした電話相談に私も参加しましたが、放射線の知識は同じ職場の方々と比べ不足しており、満足な回答ができないことも多かったです。そんな中、たまに放射線疫学に関する質問が来ることがありました。私の直属の上司が放射線疫学の専門なのですが、たまたま上司が職場におらず私が代わりに電話に出ると、実際には疫学データの解釈についての質問であり、統計学に関連するものでした。計量生物学の研究をメインに行っていた大学院時代の知識をフルに動員し、その質問した方が満足される回答を返し、同じような疑問が出た際には私を指名して電話をしたいとまで言われた際には、普段はあまり意識しませんが、計量生物学が私の大事な柱であることを再認識しました。

計量生物学を軸としつつも、就職してからは様々な研究分野に踏み込みました。特に毎年の連合大会は6つの学会が共同で開催しているため、実に様々な研究発表が行われております。私も計算機寄りの発表を何度か行ったこともありましたが。また2012年4月より、米国のNational Cancer Institute (NCI)に在外研究員として1年間滞在しましたが、その際には計量生物学の知識だけでなく、計算機寄りの知識やその研究が思いの他役に立ちました。一つのことを深めることも大事なのは当然ですが、色々な経験を積んでいると思いつけるところで役に立つことを身をもって経験いたしました。しかしながら、限られた時間の中で色々な研究分野に挑戦すると、どうしても一つの分野に費やせる時間は限られてきます。そのような時、私は各分野の専門家に助けられました。NCIに滞在中に参加させていただいた論文の書き方に関する講義で先生が言われたことが今でも印象に残っており、「論文を書くという作業は大変なものです。しかし我々は決して孤独ではない、大勢の協力者がいる」というような内容であったと思います。それは、論文を書くだけでなく、研究全体にもあてはまることだと思います。

自分自身が発表をするときも、そうでないときも連合大会には参加するようにしております。それは自分自身の研究のヒントとなるような発表を聞けるかもしれないという理由だけでなく、普段からお世話になっている共同研究者と議論ができたり、新しい共同研究に結び付いたりする可能性があるからです。また素晴らしい研究発表を聞くと、自分自身も頑張らねばとモチベーションが高められたりもします。私は、計量生物学会が引き続き幅広いバックグラウンドを持つ人にとって有意義な学会であり、なおかつ学会員同士の活発な交流の場であり続けることを期待いたします。